

ロータリーの友 2010-11

シリーズ

こんなことがありました

- 7 月 日本で初めての RI 会長が就任
- 8 月 初めての大会が開催されました
- 9 月 関東大震災とロータリー
- 10 月 第 2 回太平洋大会
- 11 月 ポリオ撲滅でゲイツ財団と協力
- 12 月 日本の地区分割が決定
- 1 月 ロータリーの雑誌の創刊
- 2 月 2 月 23 日はロータリーの誕生日
- 3 月 日本のロータリークラブが
国際ロータリーに復帰
- 4 月 1952 年、2 地区に分割直前の地区大会
- 5 月 日本で国際大会を開催
- 6 月 ロータリー財団のはじまり

日本で初めてのR I 会長が就任

7月1日、ロータリーの新しい年度が始まります。今年度は何をしようか、こういうことをやりたい、ああいうことをやりたい、と皆さまたくさんの抱負をもって意気揚々というところでしょうか。それとも、これから一年、クラブをうまく盛り立てていけるかどうか、不安を感じている会長さん、幹事さんもいらっしゃるのでしょうか。

ロータリーの年度が7月1日に始まって翌年の6月30日に終わることになったのは、1910-11年度からです。国際ロータリー（R I）で出版しているロータリー年表を見ると、それまでは、例えば1905年というように年で書かれていたものが、このときから、1910-11年度というように年度で表記されています。今年度は、ロータリー年度が始まって100年となります。

ロータリーの役職は、一部の例外はありますが、原則では任期が1年ですから、R I 会長をはじめ、R I 理事、ガバナー、クラブ会長、そして各委員会の委員など、すべてが代わります。新R I 会長の新しいR I テーマのもと、気分を一新して、新しい年度が始まります。

日本で初めてのR I 会長、東ヶ崎潔氏が就任したのは、1968年7月1日。東ヶ崎氏は、「PARTICIPATE!（参加し敢行しよう!）」というR I テーマを掲げましたが、このテーマ（英語）は、いちばん少ない語数のR I テーマです。

東ヶ崎氏は、「ロータリーの会員であることは、ある特典と機会とが与えられたことであります。それはわれわれの間に同僚愛を培い、人とでき事についての理解を持たせ、新たな責任を負わせます。それはわれわれに、職業、地域社会並びに世界における各種の必要を見出させ、それらを満たすための援

助を要請します。しかしロータリーは、われわれがクラブ活動に従事するときのみ、換言すれば、われわれがそれに参加し敢行するときのみ、その効果を十二分に発揮することができるのであります」と述べています（『友』1968年7月号）。今から40年以上も前の言葉ですが、その言葉は今でも、ロータリアンに指針を与えてくれるのではないのでしょうか。

1895年9月24日、アメリカで生まれた東ヶ崎氏はアメリカで教育を受け成長しました。その後、



日本に移住をした彼が東京ロータリークラブ（RC）に入会したのは、ジャパンタイムズの社長に就任したころのことです。戦時下にあった日本では、軍部から外国との結びつきが警戒され、1940年に解散を命じられていました。しかし、会員たちは、水曜会と名前を変え、例会を続けていました。正確に言えば、東ヶ崎氏が入会をしたのは、この水曜会です。日本は厳重な食糧配給統制下にあり、会員たちはそれぞれ弁当を持ち寄って会合を開いていた、と東ヶ崎氏は回顧しています。

1949年、東京RCがR I に復帰したとき、もちろん東ヶ崎氏も会員として名前を連ねています。

戦時下、日本のロータリーが一番苦しい時代にロータリークラブに入会した東ヶ崎氏は、それでも信念を貫き通している仲間の姿を見て、ロータリーの神髄を学んだのかもしれない。また、戦後の復興期に力を尽くす仲間の姿を目の当たりにしたことでしょう。そんな彼のロータリーでの経験が「PARTICIPATE!（参加し敢行しよう!）」というR I テーマとして表れたのかもしれない。

『友』編集長 二神 典子

初めての大会が開催されました

今から100年前、1910年8月15～17日、ロータリークラブは、シカゴで全国大会を開催しました。これがロータリーで初めての年次大会です。この大会で、新設された全米ロータリークラブ連合会の定款と細則が採択されました。また、会長に、ロータリーの創始者であるポール・ハリスが選ばれ、第1期の役員が選出されました。

このときに、この新しい組織の5つの目標が設定されています。

1. クラブの新設
2. 全クラブの共通の利益の推進
3. 市民としての誇りと忠誠心の奨励
4. 高潔なビジネス方法の推進
5. 個人会員の事業上の利益の増大

大会に続いて開催された理事会では、連合会の運営を担当する事務総長に、チェスリー・ペリーを選びました。

最初の大会について、「うだるように暑い8月の盛りに、代表委員らは誇りと期待に胸を躍らせてシカゴに集まった。16クラブのうち14クラブから代表委員が出席し、議決権のある代表委員、立会人、ゲストが、地域レベルでロータリーのパイオニア活動を目撃したにもかかわらず、今この時こそ、ロータリー史の、強いて言えばアメリカ史の新たな一章が書かれると信じてやって来た」と、『奉仕の一世紀』には書かれています。

皆さま、お気づきのことと思いますが、このとき、ロータリークラブはまだアメリカ国内だけにしかありませんでした。カナダ・マニトバ州ウィニペグロータリークラブができたのは、この年の11月、ロータリーに加盟したのが翌年のことですから、国際大会と呼べるようになるのは1911年の大会から。1912～13年度に、名称が全米ロータリークラブ連合会から国際ロータリークラブ連合会に改称されています。

2010年イギリス・バーミンガムで開催された大会で第100回を迎え、今年はカナダ・モントリオールで第101回の年次大会が開催されました。そのうち、日本で開催されたのは、1961年の東京（第52回）、1978年東京（第69回）、2004年大阪（第95回）の3回です。2004年の大阪国際大会の参加者は4万5,381人で、これまでで最も多い人数を誇っています。

1910年8月に始まった大会は、100年経った今でも年1回開催され、世界中から多くのロータリアンや家族が集います。国際大会では、国際ロータリー会長や理事、ガバナーを選出したり、国際ロータリーの方針や、世界中のロータリアンの活動について知ることができます。また、違う国の新しい友人ができたり、旧交を温めることもできます。皆さまも一度参加してみてください。

『友』編集長 二神 典子



1910年の大会に集まったロータリアンたち

関東大震災とロータリー

1923（大正12）年9月1日、神奈川県の相模湾沖を震源として、マグニチュード7.9の大地震が発生しました。関東大震災です。この地震によって、多くの人々が亡くなりました。90年近くたった今日でも、私たち日本人にとっては忘れることのできない大災害ですが、この関東大震災は、日本のロータリーにとっても大きな意味をもっています。

関東大震災の3年前、1920年10月20日に、日本で初めて、東京ロータリークラブ（RC）が創立。翌1921年4月1日、登録番号855をもって国際ロータリーに加盟が承認されました。

「アメリカ合衆国のように開拓された土地に新しく生まれた社会では、それを健全に守るためには、何よりもフェローシップ（仲間意識）が大切であるが、そのフェローシップをもとにして、アメリカに生まれたロータリーに対して、長い封建鎖国の時代から明治維新を経て大正デモクラシーといわれてもほんのうわべだけで旧態依然たる当時の日本人にとって、その精神はもとよりその組織運営についても、これを理解し受け入れることはまことに容易ではなかった」と『ロータリー日本五十年史』に書かれています。創立に至るまでの過程も、さらに創立した後も、「順調に」とはいかなかったようです。

会員の定款・細則に対する関心がうすく、出席も悪かったので、存続も危ぶまれるほどであったと、同書に書かれていますが、当時のロータリアンの意識を変えたのが、関東大震災が起こったときの全世界のロータリアンたちの支援の手でした。

関東大震災の報が世界中に伝わると、国際ロータリーからはガイ・ガンディカー会長の見舞い電報とともに2万5,000ドルが、1922年11月17日に日本で2番目のクラブとして誕生した大阪RCを通して送られました。また、シカゴRCが1,500ドル、サンフランシスコRC、ニューヨーク

RCから各1,000ドルが届きました。さらに、アメリカ、イギリス、カナダをはじめとする503のクラブから、義援金や救援物資が送られ、総額8万9,000ドルに達しました（現在のお金に換算して約3億円）。世界のクラブ数が約1,500、ロータリアン数が約93,000人のころのことです。東京RCでは、それらの義援金を東京・横浜の小学校の再建や被災者の救援などに充てました。

世界中のロータリアンから差し伸べられた温かい手によって、東京RCの会員たちは、初めてロータリーとは何なのかを理解できたといわれています。この出来事が、国内で、そして世界の各地で活動をする今日の日本のロータリーの礎いしずえになったのかもしれない。

関東大震災から約70年たって起こった阪神・淡路大震災のときには、全国に広がった国内各地のロータリアンが、いち早く現地に駆けつけたり、義援金を送ったり、被災した人々に手を差し伸べました。もちろん、世界中のロータリアンからもたくさんの義援金が送られてきました。いま、世界の各地で地震や台風などの災害が頻繁に発生していますが、その度に、世界中のロータリアンが支援の手を差し伸べています。

『友』編集長 二神 典子



写真提供：AP/アフロ

第2回太平洋大会

1928（昭和3）年10月1～4日、第2回太平洋地域大会が日本で開催され、海外からは9か国、109人、日本からの参加者を加え総勢568人が参加しました。

1920（大正9）年10月20日、東京ロータリークラブ（RC）が創立したことによって、初めてロータリーが日本に入ってきました。また、その後、1923年9月1日、東京は関東大震災によって大きな被害を受けました。1928年といえば、東京RC創立の8年後、関東大震災の5年後のことです。わずかな年月で、国際的な会議が日本で開催されたことから、草創期の日本のロータリーの勢いと、当時のロータリアンの情熱を知ることができるのではないのでしょうか。

オーストラリアとニュージーランドからのロータリアンと家族は安芸丸で神戸に、アメリカ、ハワイ、カナダからは太洋丸で横浜に上陸しました。今日のように飛行機で移動するのと違い、長い時間をかけ海外のロータリアンと家族たちが東京に集いました。

現代でも、ロータリーの会議に夫婦そろって出席するという習慣が、日本には定着していないように思われます。家族参加の特別例会の折や、地区大会のホストクラブの会員夫人が手伝いのために参加することくらいが、一般的なところでしょうか。まして昭和に入ったばかりのこの時期、太平洋大会に、大勢の会員夫人が参加するということを、どの程度予測していたのでしょうか。

「方々から出席者氏名が届くにつれて夫人同伴の者が多い事が明かとなり、殊にSutton氏（編集部注：当時のRI会長）は婦人と令嬢2人を伴うことが知れたので、実行委員は新たに夫人委員部を設け、東郷安氏を長として十数名からなる委員を指名し、更にその家族の婦人連中を補助せしむることにし、又大会開催中の救急用として2人の看護婦を常

時配置する手配をしたのみならず、九月中旬には家族会を開いて当日婦人連中の心得となること等の訓育（？）をすると共にダンスの会も催した」（東京ロータリークラブ ロータリー五十周年記念委員会『わがクラブの歴史 1920－1955』東京ロータリー倶楽部 1955年）と、急ごしらえで、婦人たちを迎える準備をしたことが、うかがえます。

さて、日本にロータリーが入って8年しかたっていないこの時期に、国際会議を見事に開催した成果は、どのようなものだったのでしょうか。

それまで一部の人がしか接することのなかったロータリーの国際的側面を多くの人たちが実感できたこと、東京RCを中心に国内のロータリアンたちが力を合わせて大仕事を成し遂げた自信、そのようなことが挙げられるのでしょうか。

前出の本には、「太平洋大会に参加した諸国の人々は、日本のロータリーが会員の素質に於いても、見識、行動等に於いても、稀に見るものであり、風俗習慣に差はあつても各人の胸に流れて居る親切心と奉仕の念願は一目瞭然であつたことを見て取つたらしく、帰国後友人知己に之を語り伝えたものと見られる証拠は、その後色々の形で反響を呼んで居るのである」と、自信に満ちた文章が綴られています。

『友』編集長 二神 典子



ポリオ撲滅でゲイツ財団と協力

2007年11月27日、国際ロータリー（R I）は、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団から1億ドルの補助金のチャレンジの申し出を受けたことを発表しました。補助金のチャレンジとは、資金を提供する条件として、それと同額あるいは一定額の寄付を求めることです。

これを受けて、R Iでは、その後3年間でこれと同額の資金を調達することになりました。これが「1億ドルのチャレンジ」と呼ばれるポリオ撲滅のための資金調達のスタートです。

このとき、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団共同会長のビル・ゲイツ氏は、「ポリオ撲滅があと一歩というところまで前進できた背景には、ロータリアンの並々ならぬ尽力があり、これが極めて重要な役割を果たしました」と述べています。

この補助金の額は、同額の組み合わせを求めるビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団としては、それまでで最大のものであり、また、ロータリー財団にとっても、それまでに受け取った中で最も高額な補助金でした。

さらに2009年1月21日、ビル・ゲイツ氏自ら、国際協議会で、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団が前述の1億ドルに加えて2億5,500万ドルを、R Iに提供すると表明しました。これに呼応して、R Iでは、追加で1億ドルの資金を、2012年6月までに調達することを発表、「2億ドルのチャレンジ」になり、現在、世界中のロータリアンがそれぞれのやり方で資金集めに尽力しています。

ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団が、R Iに資金提供をしたのは、この2007年が初めてのことでありません。2002年に8,000万ドルを提供しています。このときR Iでは、創立100周年を迎える2005年までにポリオを撲滅することを目指し、「約束を守ろう、ポリオをなくそう」を合言

葉に、「ポリオ撲滅募金キャンペーン」を展開、目標の8,000万ドルに対し2倍の金額が集まりました。

1979年9月、R Iはフィリピンで、生後3か月から36か月の子ども約600万人に対して、5年間のポリオ免疫活動を始めました。これがR Iの最初のポリオ撲滅の活動になりました。その後、1985年、R Iは正式なポリオの撲滅に取り組み始め、現在も、世界中のロータリアンたちが、ロータリーの最優先事項として、取り組んでいます。

残念ながら、当初目指していたように、ロータリー100周年までにポリオを撲滅することはできませんでしたが、現在、ポリオが常在する国は4か国にまで減少しました。これらの国々での発症例も、2010年度に入って急激に減っているとの朗報が、2010年モントリオール国際大会で、世界保健機関・世界ポリオ撲滅推進計画責任者のブルース・アイルワード博士から発表されました。同氏は、「史上初めて、ポリオを最後の拠点から追放できる状況になりました。また、6か月間インドのウッダパダ州で全く症例が発生していません。ナイジェリアにおいても、ポリオの発症が99%減少しました。ロータリアンの皆さまはこの瞬間を待っていたことと思います」と述べています。 『友』編集長 二神 典子



日本の地区分割が決定

1940年に国際ロータリー（R I）から脱退した日本のロータリークラブがR Iに復帰するのは、1949年のことです。しかし、復帰してしばらくは、たった1地区しかありませんでした。

その後、戦後の復興が進むのに合わせるかのように、国内のロータリークラブは、戦前あったクラブの復帰はもちろんのこと、新しいクラブの創立も盛んになり、どんどん数を増し、活動も活発になっていきました。

そんな折、1951年のことです。『ロータリー日本六十年史』によれば、「かねて要望されていた地区の分割について国際ロータリーから12月3日に入電があった」と、日本の地区分割の知らせを受けた様子を紹介しています。このとき日本の地区は、石川、岐阜、三重県を含む東日本の地区と、西日本の地区に分割されることが決まったのです。

分割の決定を受けて、翌年の春に開催される予定だった地区大会をまたず、郵便投票で、ガバナーノミニーを選ぶことになりました。このときに選ばれた二人が、分割後の初代ガバナーとして、1952年7月1日に就任しました。第60地区は小林雅一氏（東京RC）、第61地区は鳥養利三郎氏（京都RC）です。

1951年12月3日、次の年度から日本が2地区

に分かれることを知らされたとき、当時のロータリアンはどのような思いで、この知らせを受け取ったのでしょうか。R Iを脱会して、水曜会、木曜会といった名前で会合をもっていた戦時中の日々や戦後の復興に力を尽くしながらR Iへの復帰を待ち望んだ日々が頭を駆け巡り、ようやくここまで来ることができたと、感慨ひとしおだったことでしょう。その一方で、一緒に活動を続けてきた仲間たちと違う地区になってしまうことに一抹の寂しさを感じていたのかもしれない。

1952年4月25日、日本全国が1地区時代の最後の地区大会が、大阪の中之島中央公会堂で開催され、このときに『ロータリーの友』の発行が決定しました。このことによって、分割後も両地区、すなわち日本全国のロータリアンならびにロータリークラブが一つの雑誌によって結ばれることになりました。『ロータリーの友』は、日本の地区が34にまで増えた現在もなお、日本全国のロータリアンを結んでいます。

地区分割前の最後の地区大会では、新しいロータリーソングが披露されました。このとき披露された歌には、今でもさまざまな機会に歌われている「手に手つないで」が含まれています。

『友』編集長 二神 典子

1地区から2地区へ



ロータリーの雑誌の創刊

The National Rotarian



ロータリーの創立から6年後の1911年1月、『THE NATIONAL ROTARIAN』が、国際ロータリーの初代事務総長、チェスリーR.ペリーによって、創刊されました（現、『THE ROTARIAN』）。

創刊号には、ロータリーの創始者、ポールP.ハリスの論文「Rational Rotarianism（合理的ロータリアニズム）」が掲載されています（『友』誌2010年1月号横組みP6～13に全文を掲載）。

創刊号の中で述べられているように、その雑誌はふたりが「すべてのロータリークラブだけではなく、すべてのロータリアンへ」メッセージを伝える手段でした。その後も、ポール・ハリスをはじめ、さまざまなロータリアンたちの、仲間のロータリアンに向けたメッセージが掲載されました。

しかし、この雑誌はメッセージだけではなく、さまざまな出来事を全世界のロータリアンに伝えています。1923年の関東大震災の折、全世界のロータリアンから日本への救援の手が差し伸べられたのも、この雑誌が日本の被災状況をいち早く伝えたことによるところが大きいと思われます。その後も、世界で大きな災害が発生していますが、『THE ROTARIAN』にそれらの被害状況と、ロータリアンが差し伸べた支援の数々が掲載されてきました。

災害ばかりでなく、ロータリアンが実施してきた人道的な支援や教育的な支援、それらの恩恵を受けた人々のその後の様子が、この雑誌の誌面を飾っています。さらには、それぞれの時代の状況を反映した、一般的なりポートもあります。

さて、『THE NATIONAL ROTARIAN』の創刊から42年後、1953年1月、日本でもロータリーの

雑誌が創刊しました。『ロータリーの友』です。この雑誌は、戦後1地区であった日本のロータリーが、1952年7月に2地区に分割されたことがきっかけで創刊が決まりました。別々の地区に分かれても、お互いを結ぶ何かをほしい、そんな当時のロータリアンの気持ちが新しい雑誌となって表れたのです。

地域社会や海外での日本のロータリアンの活動は数え切れません。個々のクラブの活動が、ほかのクラブの活動の参考になったり、掲載された記事を通して知らない人同士またはクラブの交流が始まったり、創刊のときのロータリアンの思いを具現化する出来事もたくさんありました。

それだけでなく、この雑誌も『THE ROTARIAN』と同様に、多くのロータリアンのメッセージを伝えてきました。災害とそれに手を差し伸べるロータリアンの姿も伝えています。

雑誌は、いつもそのときの最新の状況を伝えていますが、バックナンバーを見ると、それぞれの時代を思い起こすことができます。『ロータリーの友』では、日本の復興、発展の状況を見ることができます。今では発展途上国への支援として実施している活動も、50年前には日本国内の人々に向けた活動として実施していました。寄贈する自動車も、そのとき、そのときの車種が時代を映しています。子どもたちの服装や髪型にも時代が表れています。

これから世界はどのように変わっていくのでしょうか。ロータリーはどのように歩んでいくのでしょうか。『THE ROTARIAN』も『ロータリーの友』も、これからもさまざまな情報を伝え続けていくことでしょう。

『友』編集長
二神 典子



2月23日はロータリーの誕生日

1905年2月23日、この日、弁護士のポール・ハリスは、3人の仲間と会合を持ちました。ロータリーの始まりです。この3人とは、石炭商のシルベスター・シール、鉱山技師のガスターバス・ローア、仕立業のハイラム・ショーレーでした。

ポール・ハリスは『ロータリーへの私の道』に、当時のシカゴでの生活について「日曜の朝は下町の教会へゆけばよかったのですが、長い日曜日の午後はどうにもならないほど孤独でした。(中略)市内の公園などを散歩しても、どうにもなりません。すべてがあまりにも人工的で、しかも散歩している人びとのなかに、知った顔ひとつなかったのです。日曜日の午後の市内の公園ほど、孤独を感じさせるところはありません。知らない人がたくさんいることが、かえって限りなく広がる大海原や大平原にいる以上に、孤独感を強めるのです」と書いています。彼は、知り合いはいても友人がいない大都会シカゴで、孤独な日々を送っていたのです。

彼は、「人間には友人がなければならぬということも、先に述べたような経験をしなかったら、私もそれほど必要だとは思わなかったでしょう。おそらくこれも宇宙の仕組みの一部となっているもので、人間は同類の人たちと友人関係をもたなければならぬということがはっきりとわかったのです」と書いています。そういう経験や思いから出てきたのが、新しいクラブをつくることでした。

ポール・ハリスは最初の会合について、「自分の村で知っているような、お互いの協力と気取らない友情を深めるための簡単な計画を彼らに提示しました。彼らは私の計画に賛成してくれたのです」と書いています。

『奉仕の一世紀』には、「その日の午後遅く、ポールとシルベスターはマダム・ガリのレストランで夕食を共にし、親睦とビジネスを推進するクラブという構想について話し合った。(中略)夕食後、ポールとシルベスターはディアボーン・ストリート127番地のユニティービル7階にあるローアの事務所まで歩いて行った」と書かれています。

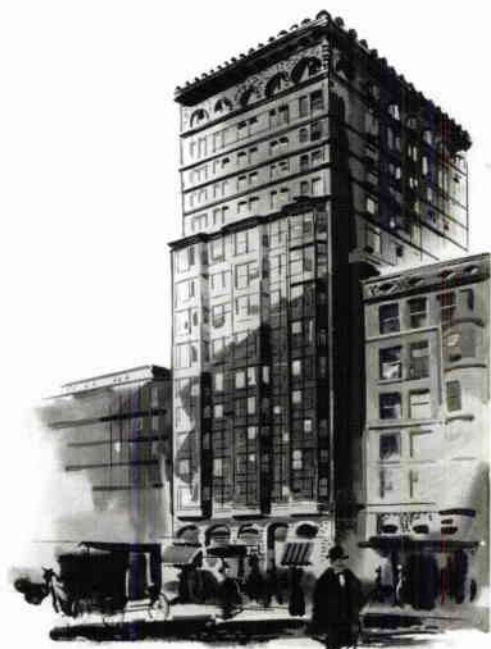
ポールは、会合の前にシカゴでの一番の親友であったシルベスター・シールに会い、自分の構想への後押しを頼んだのかもしれませんが。

余談ですが、この時2人がマダム・ガリの店で食べたのはスパゲティ。ポールは『The National Rotarian』(『The Rotarian』の前身)1912年3月号で「私はシールとマダム・ガリに行って、スパゲティ・ディナーを食べたのをよく覚えています」と述べています。

現在200以上の国と地域に、120万人のロータリアンを擁する組織は、20世紀の初めに4人から始まりました。その後、順調に仲間を増やし、ロータリーはアメリカ全土に広がっていきました。会員が増えれば、違った考えや経験を持つ人も出てきます。本誌2010年1月号横組みP6～13に紹介したポール・ハリスの「合理的ロータリアニズム」は、1911年1月に発表されたものですが、そこには既に考えの違う4人が登場しています。

その後、ロータリーは海を渡り、全世界へと広がりました。それと同時に、ロータリアンの考えだけでなく、ロータリーの活動も広がり続けています。

『友』編集長 二神 典子



最初の会合が開かれたユニティービル

日本のロータリークラブが国際ロータリーに復帰

1940年、第2次世界大戦のために、日本のロータリーは、国際ロータリー（R I）を脱会します。

戦争が終わってしばらくたった1949年3月23日、東京仮ロータリークラブ（RC）ができ、同年3月29日、脱会前と同じ承認番号855で再登録をされました。

R Iを脱会した後の各ロータリークラブは、例会を開催していた曜日などを名称にして、会合を続けていました。1947年3月18日、東京の工業倶楽部にそれらの会の有志が集まって、連絡機関の設置を決め、「ロータリー復帰協議会」ができました。

『ロータリー日本五十年史』によれば、

……明くる1949年3月11日、何の前ぶれもなく羽田に飛来した^{*1}ミーンズはまず^{*2}ダーギンと連絡をとり、そのとき小松 隆に代わってロータリー復帰協議会議長となっていた手島知健と会い、また東京水曜クラブ役員とも会見し、いよいよ国際ロータリーへの復帰が可能となった旨を告げた。

復帰の条件は次の3カ条で1.現在の各曜会、各曜クラブを解散すること。2.国際ロータリーの定款細則を厳守すること。3.国際ロータリーへの義務を完全に履行すること。なお各クラブはそれぞれ国際ロータリーに直結するもので、戦前のように日本のクラブだけで一つにかたまることのないように、という注意がつけられていた。

とあります。

最初に復帰が認められたのは、3月29日東京RC、4月5日京都RC、4月13日大阪RC・名古屋RC・神戸RC、4月22日福岡RC、5月2日札幌RCの7つで、これらのクラブで第60区を形成することになり、初代ガバナーとして東京RCの手島知健が選出されました。

前出の『ロータリー日本五十年史』には、

復帰クラブがチャーターナイトを催すかどうかはいろいろ意見もあったが、東京クラブは4月27日工業倶楽部でのその例会で伝達式を行

ない、ミーンズから会長小林雅一にチャーターが渡された。ここへは首相吉田茂も出て祝辞を述べ、G. H. Q. 総司令官マッカーサー元帥のステートメントもあったが、それには戦後日本で国際団体へ加入が許されたのは宗教関係を除けばロータリーが最初であるといい、さらに東京ロータリークラブの名誉会員を受諾することを光榮とすると書かれていた。

とあります。

この後、戦前にR Iから脱会したクラブが次々に復帰し、さらには新しいクラブの創立も相次ぎます。そして、3年後の1952年7月に始まる年度には、日本の地区が2地区に分割されるまでになります。

1949年7月、第60区が発足して最初の地区協議会でガバナーの手島氏はロータリー情報とロータリー財団の重要性を強調しましたが、その後の日本のロータリーは、その教えを守り、R Iの中核的役割を担うまでになりました。『友』編集長 二神 典子

- *1 ミーンズ ジョージ・ミーンズ氏 第3代R I事務総長
- *2 ダーギン ラッセル・ダーギン 戦前に東京ロータリークラブの会員で、1948年12月GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）に赴任するとすぐに東京水曜クラブに入会



一九四九年、東京ロータリークラブチャーターナイト（認証状伝達式）

1952年、2地区に分割直前の地区大会

1949（昭和24）年、国際ロータリー（R I）に復帰した日本のロータリーは、クラブ数、会員数とも順調に増えました。戦前は実業人がほとんどのロータリークラブに、医師、弁護士、学者などの専門職の会員も増え、ロータリアンの職業も多種多様になっていきました。1951（昭和26）年12月3日、R Iから、翌年の7月、東西2地区に分割されることになったとの知らせが入りました（『友』誌2010年12月号横組みP23本欄に詳細を掲載）。

そして、分割前、日本全国のロータリアンが一堂に会する最後の地区大会が、1952年4月25～26日に、大阪で開催されました。

第1日は大阪中之島中央公会堂で開催。『ロータリー日本五十年史』には、「星野ガバナーはその告辞で約束を守らないロータリアン、人に迷惑をかけて恥じないロータリアンがいて日本をロータリーの浄化を叫び、奉仕こそわがつとめより一歩を進め、人生は奉仕、奉仕のための人生でならぬと言ったが、このロータリーに対する先覚者の厳しさはしっかりと銘記されておかなければならない」と書かれています。いつの時代も「倫理」は大きな課題のようです。

また、R I会長代理のG. E. マーデン氏は、国際大会で上程される議案を「R I会長やガバナーの任期を2年にする」「人頭分担金の増額」「出席規定の改正」「ロータリークラブ運営の諸問題」の4つに分けて説明しました。自由討議ではガバナー事務所の経費などについて意見交換されたようですが、こういったことも、今と変わらない問題であったようです。

さて、地区大会などの懇親会の幕を閉じるのに欠かせないのが、ロータリーソングの「手に手つないで」。参加者全員が手をつないで一つの輪になりこの歌を歌うのを初めて見た時、驚かれた方も多いと

思います。また、初めのうちはこの輪の中に入って歌を歌うのを少し照れくさく思っていたものの、ロータリー歴が長くなるにつれて、この歌がなければ何か物足りないなどと思う方も多いようです。この「手に手つないで」が発表されたのが、この時の地区大会です。

余談ですが、今日多くのロータリークラブで歌われている「奉仕の理想」「我等の生業」は、1935年5月に京都で開催された地区大会で発表されたものです。

第2日は宝塚歌劇場で園遊会が計画されていましたが、私鉄のストライキとぶつかり、会場を急ぎよ大阪劇場に変更して開催されることになりました。ストライキで予定の会場に行くことができないという非常事態に短い時間で決断し、新しい会場の決定、その会場の設営といった一連の対応は、とても大変なことであったと想像できます。それら乗り越えて、地区大会を見事にやり遂げたと聞けば、当時のロータリアンに敬意を表する方も多いことでしょう。

この大会で日本全国のロータリアンを結ぶ日本語の月刊誌刊行が決定され、それが1953年1月の『ロータリーの友』の創刊につながりました。全国のロータリアンが一堂に会する機会はなくなったものの、日本の全てのロータリアンが結ばれていたいという当時の思いは『ロータリーの友』という雑誌に受け継がれているのです。『友』編集長 二神 典子



日本で国際大会を開催

日本で、国際ロータリー（R I）年次大会（国際大会）が開催されたのは、これまでに3回ありました。いずれの大会も、5月。気候の良い、この月に開催をされています。

初めて国際大会が開催されたのは、1961（昭和36）年。当時、東京の晴海ふ頭に新しく建設された国際見本市センターを中心に開催され、登録者数2万3,366人、そのうちの約7,400人が海外からの参加者でした。

アジアで初めての記念すべき国際大会でしたが、今ほど海外との行き来が盛んではない時代に、これだけの人たちを海外から迎えたのは、驚くべきことだったと思われまます。この大会の成功によって、日本のロータリーは、世界のロータリーの中での地位を高め、また、国内でも広く一般の人たちに、ロータリーを知らせることができたと思います。

2回目は、1978（昭和53）年5月14～18日に、東京・代々木にある国立競技場第一体育館で、3万9,834人の登録者を得て開催されました。東京オリンピックが、大阪で万国博覧会が開催され、このころになると、日本にやってくる外国人も多くなってきました。しかし、この登録者数は外国のロータリ

アンだけではなく、日本のロータリアンも高い関心を寄せ、数多くの人たちが参加したことを表しています。今日に至るまで、その記録を破ったのは、大阪（関西）国際大会だけです。

当時のR I会長W. ジャック・デービス氏は「R I会長として、この大会が圧倒的な成功を収めたことは、喜びに堪えない。これはひとえに1年以上にわたって、あらゆる角度から努力を重ねたホストクラブの方々、そして側面から多く支援を寄せられた全日本のロータリアンの方々のおかげという以外にない」と、その成功を喜んだといわれています。また、この大会の様子は新聞各紙でも多数取り上げられました。

さて、国際大会史上、最高の登録者数を誇るのは、大阪（関西）国際大会の4万5,381人。2004（平成16）年5月23～26日、大阪ドームで本会議が、大阪国際会議場で分科会が開催されました。この大会で日本のロータリアンは、ロータリーの国際性を目の当たりにし、一方、海外からのロータリアンは、日本の伝統や文化、さらには最新技術などに触れました。

細部にわたり心遣いがいき届いた大会で、当時の

R I会長ジョナサン・マジアベ氏は、「懸命に仕事をしてくださったすべての日本のロータリアンの方々にお礼を申し上げたいと思います。この第95回R I年次大会をこのように成功裏に導いてくださった皆さまに照明を当ててください。日本のロータリアンの方、皆さまお立ちになって手を振ってください。われわれの感謝を表す意味で拍手をしましょう」と呼びかけました。

今度、日本で国際大会が開催されるのはいつのことになるのでしょうか。そのときも、また、日本らしいおもてなしの心で、世界中のロータリアンとその家族をお迎えできることと思います。 『友』編集長 二神 典子



ロータリー財団のはじまり

1917年6月17～21日、アメリカ・ジョージア州アトランタで開催された国際ロータリークラブ連合会の年次大会は、その後のロータリーの行方を変える大きな一歩となりました。

この大会で、前年の7月に会長に就任したアーチ・クランプは、「さまざまな社会奉仕を今まで通り返り続けていこうと思うなら、世界で善をなすための寄付金を受け取ることは極めて適切なことだと思われる」と述べ、新しい基金の創設を提案しました。

彼の提案は、同大会で採択されました。ロータリー基金（ロータリー財団の前進）への最初の寄付は、ミズーリ州カンザスシティロータリークラブからの、26ドル50セントでした。

しかし、今日多くの成果を挙げているロータリー財団が、最初から順風満帆だったわけではありません。6年たっても基金の残高は700ドルにすぎませんでした。その後1929年に始まった世界大恐慌、1939年からの第2次世界大戦と、ロータリー財団には試練の日々が続きました。

1947年1月27日、ロータリーの創始者ポール・ハリスが亡くなりましたが、このことがロータリー財団の転機になりました。『ロータリアン必携』（1995年）には、

ポールの逝去で、寄付が国際ロータリーに相次いで寄せられるようになりました。財団はポール・ハリス記念基金を設け、ポールに敬意を表したいロータリアンに対して、財団強化のために寄付するよう要請しました。その反響は素晴らしいものでした。翌年の7月までに、米貨130万ドル以上が寄付され、永年の目標である200万ドルの寄付が射程距離に入ってきました。

1947年には最初の財団プログラムが実現されました。それは、高等研究奨学金と呼ばれるもので、1年目は、米国、ベルギー、英国、フランス、メキシコ、中国の18人の若い人たちが選ばれ、他国でそれぞれの専門分野を勉学しました。当時は、この人たちはポール・ハリス・フェローと呼ばれていましたが、最初の国際親善奨学生でした。

とあります。その後、教育プログラムに、人道的プログラムに、このロータリー財団は貢献しています。また『奉仕の一世紀』は「希望の財団」の項を

ロータリー財団が、これほど効果的なのは、資金と人を組み合わせるからである。アーチ・クランプはこのように述べている。

「金だけでは、大したことはできない。個人の奉仕は、金がなければ無力である。この2つが組み合わせれば、文明への天の恵みとなることができる。」

ポール・ハリスは1934年にクランプに出した手紙にこう書いている。「私たちは、あなたがこの運動に何年も注いできた努力以外に、おそらくこれといった努力をすることなく、いつか、突然、自分たちが何か非常に重要なものになっているのに気づくような気がする。」

ロータリー財団への支援が世界的ではなかったときに書かれたこの言葉は、先見的であった。クランプは1951年に亡くなったが、彼が大事にしたロータリー財団はすでに確かな現実になり始めていた。しかし、自分のビジョンについて最も楽観的だった日のアーチ・クランプ自身でさえ、「小さなひらめき」と彼が呼んだアイデアがこれほどの力を持つと想像したであろうか？

という言葉で締めくくっています。

『友』編集長 二神 典子



アーチ・クランプ